

〈3〉ウクライナ戦争、ロシアは肉弾戦、 ウクライナは戦争の領域を変える戦い

今後は、ウクライナのロシア領内を叩くミサイル確保が勝敗を決める

軍事情報戦略研究所長（軍事アナリスト） 西村 金一

はじめに

これまで、ウクライナでの戦争（以下「ウクライナ戦争」）の分析について、CISTEC journal に、2022年11月～2024年3月号まで合計4回掲載していただいた。今回は5度目の記事である。これまでは、主に、ウクライナ戦争の地上戦や電子戦について書いた。

ウクライナ軍は現在、地上戦において、ロシア軍の肉弾戦に対して、持久戦で戦い、損耗を強要している。その他に、重要な作戦として、今後の航空作戦に備えて、空域におけるロシアの警戒監視および防空戦力の破壊、宇宙の衛星を使った戦争支援を妨害する戦いを行っている。

今回は、ロシアが肉弾戦で戦い、ウクライナが戦争領域を変化させてきていることを次の順序で考察する。

1. ロシア軍、当初は戦理に基づき戦い、バフムト戦から肉弾戦に変化
2. ウクライナ軍、ロシア軍各種防空兵器の破壊を継続
3. ウクライナ軍、ロシア軍ミサイル防衛兵器の破壊を重視
4. 米欧から受ける電子戦情報がロシアの空中・地上レーダー破壊に貢献
5. ウクライナ軍、ロシアの長距離防空監視システムを破壊

6. ウクライナ軍、ロシアの各種衛星情報網を地上で破壊
7. ロシアの弾道ミサイルには、ATACMS等で攻撃するのが最適
8. ウクライナのクルスク進攻には、核抑止の狙いが含まれている

*本文の図（イメージ）・グラフは全て、筆者の西村金一が米国戦争研究所などの各種情報に基づいて作成したものである。

今回の原稿を見る場合、必要に応じて、これまで掲載の図も参考にさせていただきたい。

1. ロシア軍、当初は戦理に基づき戦い、 バフムト戦から肉弾戦に変化

最近のウクライナとロシアの地上戦を見ていると、注目が集まっているのは、ロシアの無謀な攻撃、これに対するウクライナの撃退行動、ウクライナのクルスク進攻、その結果による、ロシアの損失数についてだ。

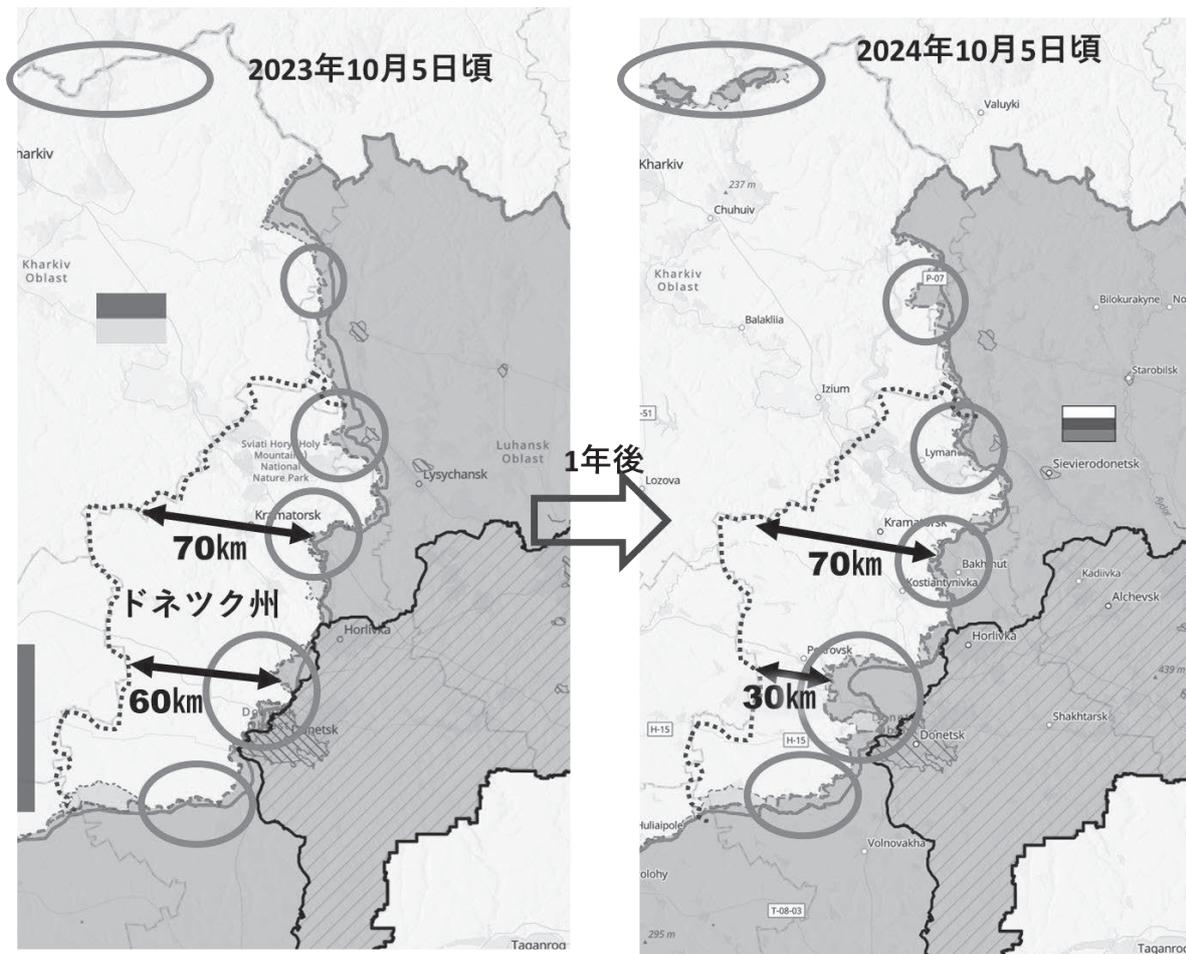
今、ロシアはどのような戦い方をしているのか、それは合理的な戦いなのか、兵士の命を犠牲にして何が得られているのかについて、兵士の損失の推移と作戦とを重ね合わせて考察する。

(1) ロシア軍のこの約1年の戦い

ロシアは、昨年（2023年）10月頃からアウディウカ方面などで攻勢を行い、今年（2024年）9月までに、5か所の地域で戦いを優勢に進め、戦線を前方に押し出している。米国戦争研究所 Critical Threats によれば、ロシアの戦果が出ているのは、下図の赤丸の地域であり、どれほど進展したかは、図に示し

ている範囲である。ロシアは、約1年の期間に、これだけの戦果を出すために、「歩兵の肉弾戦」と呼ばれるほどの犠牲を厭わない攻撃を行った。そして、ウクライナ軍のクルスク進攻に対して、プーチンから当初9月一杯、現在は10月中旬までに「撃退せよ、国境線まで押し返せ」と命ぜられているが、10月5日段階で、命令通りに達成できる見込みはない。

図1 ロシア地上軍の進出線の変化（2023年10月5日と2024年10月5日頃）



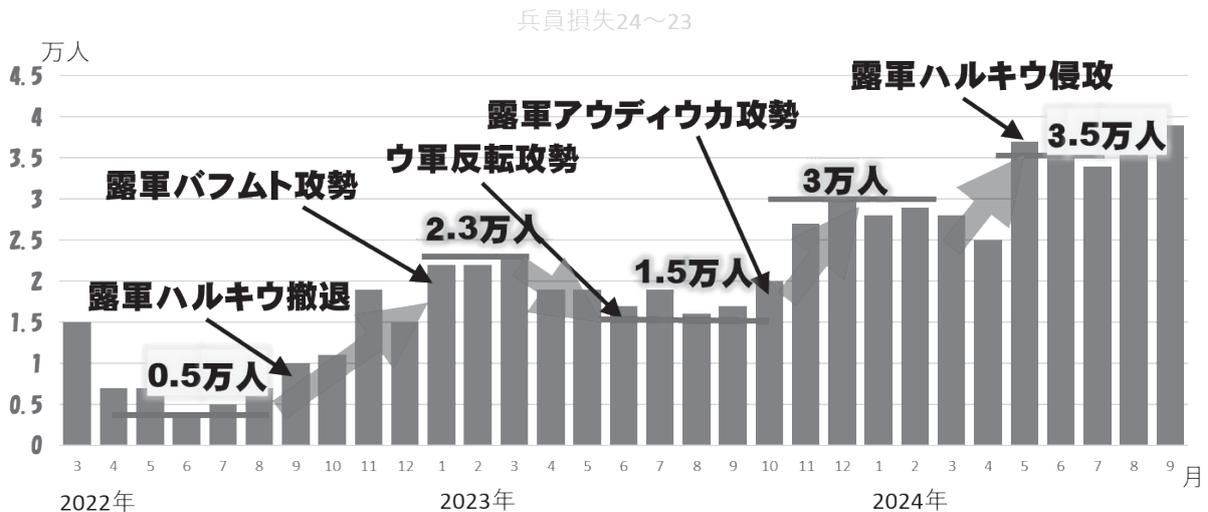
出典：米国戦争研究所 Critical Threats 両軍占拠地域の経年変化

(2) ロシア軍の戦い方と兵員損失数の変化

ロシアは侵攻当初、キーウを含めた各正面で、同時侵攻を行った。空挺・ヘリボーン作戦が失敗し、キーウ正面の兵站上に大きな問題が生じ、キーウからの後退を余儀なくされた。その時の1か月の損失は約1.5万人であった。その後ロシアは、戦線を縮小し、再び攻勢に出た時の各月の損失は約5千人だ。戦線を縮小しても、ロシアはドニプロ川まで進み、東岸までを占拠しようという構想だったように思わ

れる。ところが、その構想に反して、ロシアの作戦はハルキウやヘルソンで失敗し、後退することになった。その時から、徐々に損失が増加した。

グラフ1 ロシア軍兵員の月間損失数の推移と作戦との関係



出典：ウクライナ軍参謀部日々発表のロシア兵員損失数を、筆者が月ごとにグラフに作成し、補足説明を加えた。月の期間は、先月（開始）の24日から翌月の23日の間であり、その数値を合計したものである。以下のグラフの出典等も同じ。

2023年1月頃から、プリコジン率いる軍によるバフムトでの損失を顧みない攻撃で、月間約2万人の損失を出した。これは、この時の攻撃があまりにも悲惨であったことから、「肉挽き攻撃」とも呼ばれた。とはいえ、プリコジン軍の攻撃は、接触線を前に進めたという一定の成功を得た。ロシアはその部分的な成功体験を参考にする要領で、主に5か所で攻勢を実施している。この攻撃は今(2024年9月末)も続けており、戦線を前に推し進める成果は出ている。だが、1か月あたりの損失は3万人を超えた。この攻撃と併せて、2024年5月、ハルキウからの侵攻を開始した。侵攻1か月後に縮小した戦線を、この時期になって、再び拡張したのだ。この時期の損失は、1か月あたり3.5万人に増加した。

ロシアは、侵攻1か月後、戦理に叶う、より効果的な戦いをするために、戦線を縮小したはずであった。戦線を縮小した時の各月当たりの損失は5千人。ここから、2万人、3万人、3.5万人と、今では、約7倍に増加しているのである。なぜ、このような損失がでるようになったのか。プリコジン軍の戦った小さな戦果に引き込まれ、戦術のない、兵士の命を犠牲にした無謀な攻撃を行っているからだ。今でも、小さな戦果をあげるのが精一杯である。

(3) ロシア軍の戦い方と火砲損失数の変化

ウクライナ軍参謀部発表によれば、ロシア火砲(榴

弾砲・多連装砲・迫撃砲)の損失は、ロシアの侵攻開始から2024年7月までに、合計約20,000門である。損失の推移を見ると、侵攻当初から、ウクライナの反転攻勢の2023年6月頃までの14か月間は、両軍の攻防はあったものの200門/月前後であった。

ウクライナの反転攻勢が始まると、ロシアの火砲の損失が増加して、約200門/月から約1,000門/月に増加した。ウクライナに火砲とその弾薬が不足し始めると、ロシア火砲の損失は急減し、2023年12月には、約400門/月まで減少した。この時期には、ロシアはアウディウカでの攻撃を強化したこともあり、ウクライナはかなりの苦戦を強いられた。

その後、ウクライナへ兵器・弾薬が供給されると、ロシアの火砲の損失は、右肩上がりが増加し、今年の8月には1,600門を超えている。期間別に見ると、2022年10月までの6か月間で約2,000門、2023年5月から同年12月までの8か月間で6,200門、2024年1月から同年8月までの8か月間で約9,400門であった。特に、最近の8か月の損失数は、侵攻当初8か月間と比べ、約5倍となっている。